

守護女神戦争後の女神ブラン、その記録

古参近衛隊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女神ホワイトハートことブラン。

混迷期のルウェイーを導き、ゲームギョウ界の歴史を一変させたとも言われる、ルウェイー史上最初で最後の女神であり、かつ最も偉大な指導者である。

晩年の彼女の著作、「女神の時代の歴史」に綴られた自身の記録から、ほんの少しだけその体験を振り返ってみよう。

初代ネプテューヌの補完のような短い内容となっています。
ゲームを遊んでいないとわかりにくいです。

目
次

守護女神戦争後の女神ブラン、その記録

守護女神戦争後の女神ブラン、その記録

ランドームシティはギルド過激派により建設されたルウイー辺境の街である。

自分の大陸の女神を信仰しない、異教徒たちの隠れ蓑であるこの街は、公にはルウイー教院の管区の一つではあったが、

その実態については協会関係者や女神までも与り知るところだつた。にも関わらず、協会側はこれを無視していた。

ルウイーにはこういったギルド都市がいくつか存在している。

ギルド過激派による、アントルメ（中央協会）襲撃……内と外からの攻撃で、協会内部は大混乱に陥つた。その直前、ホワイトハートを救う為フイナンシェとネプテューヌ達一行は女神の部屋を訪れていた。

「ホワイトハート様、過激派ギルドの襲撃があるわ。早く逃げる用意をして」

「……!? 急に入ってきたと思えば、一体あなた達は……」

「襲撃ですよ、ホワイトハート様！ 冗談などではありません！」

既に内通者により協会内部にはモンスターが放たれ、叫び声が部屋にまで届いている。

フイナンシェは無理やり主人の手を引こうとしたが、ホワイトハートはそれを振り払つた。

「私は逃げない。私がいれば協会は安全だから。」

「人相手に守護の力が働くとは思えないけど？」

女神の守護の力。それはモンスターから人々を守る為の力であり、守るべき人からの悪意には全く無力である。

「関係ないわね。私は戦える。クソつたれ、私がただの飾り物でないと奴らに教えてやる……ルウイーの女神は降伏しないものよ！」

「いや何言つてんの…。ネプ子、さつさと女神様を連れて街まで逃げるわよ！」

「いいわ、私が後ろから抱えるから、あいちゃんとこんぱは左右を

……

ネプテューヌに無理やり後ろから抱き上げられ、他の3人が四肢を拘束する。

必死の抵抗もむなし。

「お前らっ、おい！やめろやめろ！放せーっ！」

ホワイトハートはしばらく抵抗していたが、やがて諦めたのか4人に抱えられるがまま地道を逃げていく。

悪態をつきながらも、その顔にはどこか決意を秘めた表情をたたえていた……

アントルメを乗つ取つた過激派たちの首魁が倒されると、指揮官を失つた鳥合の衆は散り散りとなつて逃げていった。

協会へ帰還したホワイトハートは、今回の一件の礼をするためネプテューヌ達を呼び出した。

「今日は私直々に、お礼を言うために呼んだわ。あまり言いたくないけど。……ありがとう。これまで自分の大陸のことは気にかけてたつもりだつたけど、まだまだ知らない事があると分かつて良かつたわ」

「どんでもないです！女神様からお礼なんて…私達が勝手にしたことですから！」

「けど、過激派の連中はまだ潜伏したままでしょ？しばらくは大丈夫だと思うけど…気をつけて、女神様」

「ええ。分かってる。部外者に心配されるまでもない」「（その部外者つて呼び方やめてくれないかしら……）」

アイエフはやれやれという仕草をする。

「でもさー、命の恩人のわたしたちにお礼を言うだけ？そのためだけに呼んだの？何か出してくれてもいいんだよ！」

「むつ……そうね。実は、鍵の欠片の手がかりを掴んだの。欲しがつてた情報でしょう？イヤならこの事は忘れてお金か何かでお礼をす るけど」

「……待つて、ネプテューヌ。」

「ごめんなさい女神様、お願ひだから情報にして？」

「殊勝な心がけね。じゃあ、情報を教えるわ……」

「それじゃ、わたしたちそろそろ行くね！じゃあねホワイトハート様

！」

用事を済ませ帰ろうとするネプテューヌを、ホワイトハートはやや反射的に引き止めていた。

「え？ 何？」

「ああ、ええと……クレープ、おうつてくれたでしょ。そのお礼もついでにしておくわ」

「いいよいよそんなこと！ ま、あの時はまさか女神様だとは思わなかつたけどね」

「ええ……それで、貴女はまだ、記憶を取り戻したいと思つてるの？」

真剣な目つきで問う。

「うん。やっぱり、わたしが何者なのか、何をしてたのか、どうしても気になるもん」

「忘れていたほうがいい事もある。あなたは責任が大嫌いだつて言つたけど、思い出してしまえば、もう逃げられないかもしれない。それでも？」

「うん、それでも。どんな過去があつたとしても、やっぱり記憶を取り戻したって気持ちは変わらないよ！ わたしはそうしたいの」

「そう…そう。ならもういいわ。引き止めて悪かつた。早く行きなさい」

「私のしたい事……」

昼を過ぎ、部屋に影が差し始める。ホワイトハートはファイナンシエを呼びつけて食事の用意を命じると、これから果たすべき”私のしたい事”に思いを馳せていた。

2度の説得を経て、マジエコンヌ討伐に参加することを決めたホワ

イトハートことブランは、その日の夜ネプテューヌと2人で街へ繰り出していた。

休日の夕食時という事もあって、通りは飲食店へ立ち寄る人々で賑わっている。

「……なんか、こうやって街を歩くのは久しぶり。貴女と来て以来かしら」

「えー、自分の国なのにお散歩とかしないの？」

「前まではほとんど神界にいたし、最近は仕事が多くて外になんて出られなかつた。ネプテューヌもそうだつたでしょ」

「わたしは結構お忍びで遊んでたよ？」

「……マジで？」

守護女神戦争の最中に遊ぶ余裕があつたとは、と驚きを通り越して呆れていたが、すぐにクスクス笑い始めた。

「ふふ……そうね。そういうところも、貴女のいいところかもね」

「なんか、いきなりデレるね？」

「なつ！ちげえ！そういうんじやねえ！」

「わーブラン顔真っ赤ー！」

「お前……！お前のそういうところは嫌いだーつ！」

耳まで真っ赤になつた顔がタコさんワインナーめいでいる。

しばらく歩くと、かつて2人で立ち寄つたクレープ屋が見えてきた。

「ネプテューヌ、クレープ食べる？ 今回は私が奢るから、これで貸し借りナシよ」

「いいのっ!?あー、でも貸しだなんて思つてないから、気にしなくていいよ！ご厚意には甘えさせていただくけどね」

「決まりね。行きましょう」

ブランはチョコレート味とシナモンアップル味を注文し、近くのベンチに腰掛けると、クレープを食べながらネプテューヌに話しかける。冬の冷たい夜風にあてられて、火照つた顔はすっかり元通りになつていた。

「ねえ。私、貴女と一緒にマジエコンヌと戦う事になつたけれど。

やつぱり今まで憎み合ってきた相手だもの。こうしている間も、貴女への苛立ちが、憎しみがどうしても隠せない。隠したくないというべきかしらね？ネプテューヌだからこそなのよ……」

「わたしもブラン達に神界から落とされたこと、忘れてるわけじゃないんだからね？これでも結構傷ついてるんだから」

「ええ……分かつてる。きっとそれでいいのよね。正直で素直に……」

いい所も悪い所もあつて、それを互いに認めあつて：」

ブランがいつになく吹つ切れた面持ちなので、ネプテューヌが不思議そうに覗き込んでいる。

「何千年も戦い続けてきたのに、受け入れてしまえば案外すぐだつた。ネプテューヌ、貴女は……」

「…………」

ブランの顔をまじまじと見つめている。

「な、何？」

「ほつぺたにクリームついてる。ベタだな～」

少し間を空けて……顔を赤らめながら、

「……言つとくけど、自分で拭えるからな？」

マジエコンヌは四女神とその協力者の手により倒れ、世界にはひとまず平和が訪れた。

が、それと同時に女神たちの力はイストワールに預けられ、四女神はただの人間となり下界へ降りた。

退位後、彼女たちは女神を失い混乱した民衆を導くために奔走する事になる。

以前はただ自らの国を見守る事（ベールは大してしてなかつたもの）が仕事の大半であつたため、いざ政となると苦悩の連続であつた。特にネプテューヌは。

そんな中、ブランはかねてより計画していた、”したい事”を実行に移していく。

女神が退位したとはいえ女神信仰がなくなるわけでもなく、当然ギ

ルドも変わらず存在しており、

異教徒への風当たりもまた然りであった。

「ファイナンシェ、急だけど明日議会を開きます。教院と、国政院の首脳たちにも招集を」

「本当にえらく急ですね……サプライズですか？」

「まあそんなところよ。一応、これまで尽くしてくれたあなたへの感謝も込めてね」

「……？」

「信仰は信仰、仕事は仕事。でしょ？」

「…気づいてらしたんですか？」

「とつくにね。それじゃあ頼むわ」

「はつ……はい！」

深々と礼をして、慌ただしく駆けていく。

「さて、忙しくなるわ……次イベントに行けるのはいつになるかしら」
議会（というよりはほぼブランの演説会）の内容は驚くべきもの

だった。

女神信仰の廃止、そしてブラン自らが定めた教義に基づいた国教の制定。

教院の政治にまつわる全ての権限の停止と、それに伴う国政院の拡大、ルウィー国内に点在する協会の統一。

そして、信教の自由……温厚派と過激派とを問わないギルドの解放。

これらを含む新法案の制定を、元女神としての絶対的な権限を持つて強引に可決したのである。

半ば狂気的とも言える内容に、首脳たちはしばし唖然としていたが、

「はい、解散。」

の一声と共にブランが退席すると、来たる新時代のためにやるべき事について話し合い始めた。

女神信仰を元女神自身に否定されたことで、ギルドを含む国民たちは大いに混乱したが、

ブラン自ら啓蒙活動に努めたことで、ギルド過激派たちにも徐々に受け入れられていった。

続いてラステイションで教院が国政院に統合され、プラネットユースとリーンボックスもこれらに倣いつつ改革を進めていく事になる。「ブラン様、ギルドの代表の方がお見えになつております」

侍従フィナンシェの仕事はブランが女神だつた頃に比べ大幅に増えたが、主人への忠誠はより一層厚くなり、ブランもそんなフィナンシェに大きな信頼を置くようになつた。

「いいわ、通して」

「失礼いたします。ランドームシティ協会代表のガナツシュと申します」

「ああ、あなたね。今日はギルドの代表としてあなたを呼びました」「はつ……ブラン様には日頃お世話になつております」

ガナツシュは深々と頭を下げた。アヴニール事件から数年が経つたが、ビジネスマンだつた頃の面影がまだ残つている。

「ギルドはもはや異教徒の集合体ではない。元過激派のあなたでも、それは分かつてゐるわよね」

「ご存知でしたか。数々のご無礼、お許しを」

「構わない。ゲームギョウ界の常識だつたとはいえ、貴方達には肩身の狭い思いをさせた」

そんな世界は終わつた……ブランは軽く首を横に振つた。

「では、本題に入りましようか」

そう言うと、引き出しから1つ資料を取り出してガナツシュに手渡した。

「国政院のギルド都市回収計画よ。まあ、実質もうルウェイーの一都市つてことになつてゐるけど」

「これは……よろしいのですか？元はといえば我々は反逆者ですが」「不満？むしろ遅すぎたと思つてゐるくらいなんだけど……」

「どんでもない……他国ではまだ信教の自由まで認められているわけではありませんからねえ。女神様のお慈悲に感謝いたします」

顔の前で手を組み、祈りの仕草をする。

「私、もう女神じやないんだけど?」

「いえ、まだ女神様がいた頃のお話ですよ。ギルドの存在を知りながら、寛大な御心で見逃してくださつていた女神様の」

口元をニヤリとさせた。

「ギルド都市は正式に国政院の管理下に置かれる事になる。ギルド協会職員の処遇については、本人達に選択する権利があります。

その他細かい事についてはまあ資料を見ておいて

「……ありがとうございます。市民たちも喜ぶでしょう」

「各ギルド協会への通達をお願い。後日追つて連絡します」

「ではそのように。……しかし、なぜブラン様はここまでして下さるのですか?」

その問いに笑みを浮かべて、

「私は、私の大陸の人々全てを愛している。だからその気持ちに素直になつただけよ。

女神は国家の第一の下僕、つてね」

夏のプラネテュース協会。年2回開かれるイベントに向かう人たちで、協会前の大通りには人が溢れている。
その中にかつての女神の姿もあつた。

「ネプ子く、アンタに珍しいお客様よ」

「わたしにお客さん?なになにだれだれ?」

ネプテューヌたち元女神は、人間になつたことで自然の摂理に従い歳を取るようになつっていた。

髪を伸ばし、スタイルもよくなつたが、中身は相変わらずねぶねぶである。

「……久しぶり、ネプテューヌ。用事ついでに寄つてみたわ」

「わっ、ブラン!久しぶりー!!!」

数年振りに会う友人を満面の笑顔で迎えると、そのまま勢いよく抱きついた。

「おいつ!いきなり抱きつくんじやねえ!暑いだろ!」

「え、だつてホントに久しぶりなんだもん！てつきり1人で神界に帰っちゃつたのかと思つたよ」

「このボケつぶりも、相変わらず……」

「そんなわけねえだろ！」

「いや、会えて嬉しいよ！ブランも嬉しいでしょ？」

「……まあな。…………な、何だよ？さつきからまじまじと……」

「いや、なんか前より素直になつたなーって……」

「ブランの顔が少し赤くなる。

「い、いいでしょ別に！それが私達のいいところ、なんだから……」

「んふふ、そうだよね……でもやっぱり、ブランは変わんないよ！」

主に胸が、と言いかけた口を手で塞がれる。

「……も、も、も……」

「それ以上言わなくていい。

変わつていくものもあれば変わらないものもある、って事よね？あなたも少し太つたみたいだし」

一通り改革が終わると、ブランは指導者としての立場を辞め、アントルメの自室で執筆活動を再開した。

彼女の作風は新感覚派と呼ばれ、時代の先を行く作家として成功したが、それについてはここでは語らないでおく。